

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.31
平成18年3月25日

横浜能楽堂開館十周年



会長 新堀 豊彦

早いもので、今年は、横浜能楽堂開館十周年を迎えます。

四月から毎月、凄く充実した内容の番組が一年間続きます。

横浜の能愛好者にとつては、全く恵まれた一年になります。今にして思えば、能楽堂の開館した時のあの大きな歓び、感動がそのまま持続されて今日に至っているような思いで、改めて心の底から能楽堂が出来てよかったという現実をかみしめています。

この能楽堂が旧染井能舞台のままの復元であることは知らない方はいないと存じますが、大戦終了直後、空襲によって、東京の主な能楽堂が焼失したあ

として、また利用者として非常な誇を感じると同時に、本当によかったな、素晴らしいと思わずにはおられないのであります。

私たちは、その一翼をになつて、さらに一層協力し、私たち自身の修練の場としてさらに活用し、能の普及を図り、能楽堂の発展を願いたいと存じます。

それにつけても素人のお稽古人口の拡大強化は、当連盟にとって最大の課題であることを再確認し、各流各派の御支援と御協力を心から期待いたすものであります。

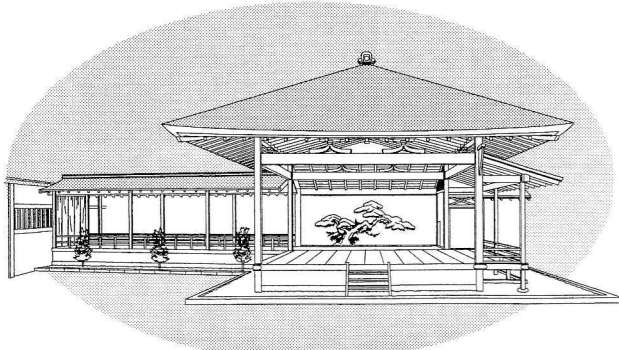
連盟活動報告

企画事業担当 鈴木 力雄

平成十七年四月に行われた定期総会において承認された活動計画に則り、横浜能楽堂との共催による第五十三回横浜能は、「田邊竹生師追善能」と「金春流による復曲能」の二日興業を開催した。

また、「横浜五流大会」と「五流交流のつどい」は予定どおり実施した。

一、「能楽大会」交流のつどいの出演者の会員種別について
二つの行事は、連盟会員が能楽堂本舞台に出演できるようにと実施している連盟の重要な事業である。



10周年を迎えた横浜能楽堂

会員と団体会員があるが、会員の種別を問わず「大会」は謡歴があり舞台経験がある方々の場として、「つどい」は初心者または舞台経験の少ない方々の場として運用してきた。

*交流のつどい
出演は個人会員であることが望ましいが、お役、地謡を問わず、所属の会が団体会員であれば認めるものとする。

二、「ワキ方や狂言方を連盟役員にすることについて」

第五十三回「横浜能」の能「輪蔵」で珍らしい替間「鉢叩」が演じられ、その面白さに観客は堪能されたようであった。このことから理事会で、「謡でも同じようにワキや狂言を交えて謡っては」と言う提案があり、話し合われた。連盟の役員には、ワキ方の下掛宝生流はまだ入っていないが個人会員として加入し、大会にも出演している。

連盟として、役員枠を設ける方向が決った。

他方、狂言を趣味とする役員も、素人グループもないようである。もし、これを求めるなら連盟として、育成して行くことになるのか？ということで行き詰っている。

このことに関する情報、提言など、知恵をお寄せ下さい。

なお第二十一回能楽大会で各流派が「駒之段」を謡い、好評であったので、九月の大会では仕舞「高砂」の競演を予定しています。

*五流大会

素謡、仕舞などお役で出演の場合は個人会員に限る。地謡での出演は個人会員であることが望ましい。

五流交流のつどい報告

当番幹事
宝生流 小林美佐子

年賀状

梅若会 鶴池 昭吾

平成十八年二月十一日(土)恒例の「五流交流のつどい」が横浜能楽堂で開催され、無事終了いたしました。

今回は、素謡十七番、連吟五番、仕舞十二番、独鼓二番と多彩な番組が組めたことは大変よかったです。

全部で三十六番が演じられ、参加者は、延べ三百三十四人、観に来ていただいた方を入れれば、大変多くの方が能楽堂を埋めてくださったこととなります。

今年も九回目ということで出演される方も年々技量が増し、各流派、がんばっているなどという感じがいたしました。

また、運営につきましても、演ずる時間や出入りに対して回を追う毎慣れてきたせいでしょうか、皆様のご協力のおかげで、とてもスムーズに行われ、予定時間を三〇分近く早めることができ、当番幹事としてホッといたしました。役員の皆様、出演者の皆様から感謝申し上げます。ここに各流派の番組内容を簡単に報告いたします。

- 観世 素謡8 連吟1
- 観・海謡 素謡2
- 梅若 素謡1 仕舞3 独鼓1
- 宝生 素謡4 仕舞3 独鼓1
- 金春 連吟2 仕舞3
- 金剛 連吟2 仕舞3
- 喜多 素謡2

「お幕」と言ったのか言えなかったのか、緊張で感覚が無くなった足で一の松まで体を運ぶのが途方もなく長い時間に感じられました。

昨年九月二十四日、横浜能楽連盟・五流能楽大会に連盟のご高配と各位のご協力をいただき、又、同門会派先輩方のご助力を仰いで能「鉢の木」の演能が叶いました。心からお礼を申し上げます。

演能の後、無我夢中で過ぎた時間がアツと言う間に飛散し、慌ただしく年の瀬を越えて正月を迎えました。

今年も能をご覧頂き感想を添えた年賀状が数多くあり、能への関心が大きい事に驚き(有頂天になって)改めて録画を見たらアツと嘆きの溜息でした。静止したアルバムではまあまあかと自己満足も、動画では隠しようもない稚拙な演能に、身の程も知らず難曲に挑んでしまった不明と後悔に冷や汗です。

見所の様子が判るようになったのは中入り後、足の関節がコントロール可能になったのは終演間近の橋懸りに入る頃でした。友人から戒をこめた(と感じました)年賀に自戒し、これからも一層の精進に努めて参りました。

いと、初詣では箱根神社で祈願しました。

丁度箱根駅伝の往路五区、復路六区を観戦しました。選手達の躍動のリズム、ひたむきな顔、正に能の面を見るようで感激、涙が出ました。

友人の一節に、「鉢の木の能舞台を見て幽玄の世界に舞い遊ぶシテの優雅な容姿?、能楽の抑揚、所作・間・言葉の言い回し、そして先人の情・信義、忘れていたものを思い出し感無量!」とありました。



能「鉢の木」 鶴池昭吾氏

また、思いがけない連絡もいただきました。「全校生徒父兄に謡曲、能の話をしていただきたい」と、小学校の校長先生からの依頼です。子供達への将来の種蒔きに懸命にPRをして参ります。

生れ変わった横浜能楽堂

宝生流 渡井 蘭子

戦災で多くの能楽堂、能舞台を失い、焼け残った染井の舞台は、一時期玄人能にも使われました。

終戦後の東京は停電が多く、演能中でも突然真っ暗に。普段でも薄暗い染井の舞台は、突然消えると見所から声にならない一瞬のざわめきがおきる。

しかし舞台では地謡も囃子も何事もないように淡々と進み、面を付けたシテは殆ど見えないでしょうが謡に合わせて舞い、パツと明るくなると見所はほつとしますが、舞台は先に進んでいくだけ。

流石玄人と唯感服した若い私。私が生粋の浜っ子と縁あって結婚し能楽界を離れ、海辺に住んだのは遠い昔。当然先に定年を迎えた主人は「今度は協力するから定年までやり終えなさいネ。二人共仕事終ったら、あちこち旅行しよう」と。でも私の定年近い頃は、会社と東京の病院と自宅を往復。約束通り無事定年は迎えたが、翌日から個室に簡易ベットを入れ二十四時間付添ったが、春を待たず主人に逝かれた。一度にすべてが終った私を案じて、各師匠から戻って来るよう強く勧められ、この道に復帰。まだ神奈川にお仲間入りする前のこと。

その後、神奈川に定着することにして、神奈川県教授嘱託会に入会、連合会、横浜能楽連盟と沢山謡友を持てました。小学生の頃から春秋の会に染井を使ってきたウチの同門会です。

さえ、水道橋が使えるようになりその後染井が解体され、大切に保管され、白梅の鏡板もそのままに横浜の能楽堂となり、深いご縁を感じます。

あの建設前の募金活動のこと、掃部山公園の奥半分を県から譲り受け、その場所に張ったテントの中で地鎮祭が行われ参列したことなどを思い出します。

昭和五十八年の宝生流教授嘱託会関東甲信越大会は、十県から参加の会員の入れる能楽堂がまだなく、熱海のMOA美術館能楽堂を拝借し、当番を済ませた。次の十年目は平成五年だったが、嘱託会本部から「新しい能楽堂が建つまで、他県に先に開催して貰うから」ということで、平成五年に茨城、六年埼玉、七年栃木、八年のこけら落としが、もし数ヶ月ずれ込んだら危ないと平成八年は群馬になった。各県のご好意で、当支部は新築二年目の横浜能楽堂で平成九年十月十七日に晴れがましく当番を終えた。今年、もう建設十年目とは。

各流でこれだけ使わせていただいているのに、益々しつとり落着いた舞台になり、日々維持して下さる関係の皆様感謝しております。染井からの来し方を思うと、感無量のものがあります。

碧水園能舞台の安信会

喜多流 中村 功

宮城県白石市の碧水園能楽堂のことは、以前から内田安信先生より伺っていましたが、昨年五月七日、念願が叶って第百四十回安信会が現地で行われました。

能楽堂は東北新幹線白石蔵王駅から西へ二軒、伊達政宗の重臣片倉氏の居城であった白石城の東南一軒の地にあり、舞台は京都西本願寺「北能舞台」を手本とし、吉野産の檜の柱、青森ヒバの床板等を用材として建築され、平成三年に落成しました。見所後部のガラス戸を全部開放して見所の中に庭を取り込み、自然の中で演能を行うという雰囲気味わえる素晴らしい舞台です。

会では内田安信・成信両先生と、翌日大牟田へ発たれますご多忙の佐々木多聞先生が応援のため来会下さり、総勢二十六名で番組は義経ゆかりの曲「橋弁慶」「八島」「安宅」「鞍馬天狗」「船弁慶」等謡九曲、仕舞一番、番外仕舞は成信先生の子息貴成君(四歳)の「七騎落」成信先生「国栖」佐々木先生「羽衣」安信先生「安宅」があり、まことに盛会でした。

白石での会、開催に当って、碧水園の方々から言葉に尽せぬお世話になり、お蔭で実に久し

振りの地方での会が滞りなく進行し、立派な舞台に出演でき、皆さんにとっても喜んでいただきたいことを感謝しています。

会終了後、宿から迎えのバスで蔵王山麓の遠刈田温泉へ約五十分、午後五時半宿・さんさ亭に到着、早速温泉で旅の疲れを癒し、宴会では地酒と珍しい山菜や心入れの珍味の数々に時を忘れ一同感激でした。



仕舞「七騎落」内田貴成君

翌日も好天に恵まれ、宿のバスで蔵王遊覧でした。まさに新緑の季節、新緑に染まるような風景の中を進むうち、桜と洋梨の花が見事で、蔵王山頂近くでは三メートルを超える雪の壁の中を進み、山頂では風が強いものの雲一つない快晴で、お釜の水の色に驚き、山形方面の雪の連山の景観に息を呑むばかりでした。山頂からの眺望を満喫した後、仙台へ約一時間、途中市内の大崎八幡宮を尋ね、国宝の社殿を見学して今回の行事を無事終了しました。

三十年前の昭和五十一年夏、平泉・中尊寺能舞台で安信会が催されたことがあります。機会が与えられましたら再度中尊寺舞台で会が開催されますことを期待しております。

「翁」を謡う

金剛流 亮一

石川島横浜金剛会では毎年一月中旬から下旬の日曜日に久良岐能舞台において初謡会を開催している。今年も一月二十九日(日)に行われた。

この会は「翁」(別名神歌)から謡い初めることにしている。去年は「翁」の役謡を謡ったが、今年も引き続き「翁」の役謡を謡った。

「翁」を謡うに当って、初めに出てくる「とうとうたらりたらりら。たらりあがりららりら」という呪文のような言葉があるが、どういう意味があるのか。謡本の辞解や他の参考資料などによると、笛や鼓の拍子の擬声から出たという説、舞楽の笛の譜から来たという説、西蔵国の祝言の歌であるという説などの諸説があるが、不明となっていることが多い。

朝日新聞の平成十七年十一月十一日の文化芸能欄に「能「翁」韓国に「里帰り」日本超えた広がり実感」という題で興

味ある記事が掲載されていた。

この記事によると、十月十五日に韓国南端の釜山市に近い金海市で催された伽椰国際文化祭に招かれての公演で観世流永島忠修師、狂言方山本則直師によつて「翁」が演じられた。

「里帰り」したといった内の一つに「翁」の呪文のような謡「とうとうたらり」と、韓国で最も古い歴史書の一つ「三国遺事」に記されている老神舞の呪句とよく似ているという説明がなされていた。

謡仲間の松上氏から「翁」に関する興味ある本を借用した。

それは、千九百九十四年十月十八号(もう一つの万葉集を讀む会：会長 李寧熙)の新解説に「翁」(神歌)について記されていた。それによると「翁」の呪文のような謡のくだりは、韓国の古語で製鉄や鉄器づくりの過程を詠んだものではないかといわれている。

その一部を引用すると、韓国語で、「とうとう(どうどう)たらり、たらりら」を日本語にすると(打ちて焼こう、焼こうぞ)

韓国語で、「たらりあがりららりどう」は日本語で(焼こう、刃物磨こう、刃が産まれます)韓国語で「ちりやたらりたらりら」は日本語で(叩けよ、焼

こう、焼こうぞ)

とゆうように訳されるそうだと。「翁」では天下泰平を寿いで慰める祭式・作法と製鉄や鉄器づくりの火入れ前に行う祭祀とがよく一致していると結んでいる。私も鉄を使って物を作ってきた人間として興味をそ、られた。

初謡会には、当日四十数名の出席者があり、皆の協力のもとで「翁」に引続き、素謡十一番、連吟二番、独吟二番、仕舞九番が行われた。また、終演後反省会が行われ、盛況のうちに無事終了した。

三井寺紀行

金春流 三浦 重信

三井寺は琵琶湖水運の港町大津市郊外の高台にある。浜大津から比叡山に至る京阪電車石山坂本線三井寺駅で降り、傍を流れる琵琶湖疎水沿いに十分程歩くと、右手小高い山の中腹に壮大な伽藍の屋根が見えて来る。天台宗総本山長等山園城寺、通称三井寺である。六百八十六年弘文天皇の皇子与多王の創建と伝えられる。

三井寺の名は境内に天智、天武、持統の三帝の産湯に用いられた霊泉があり、「御井の寺」と呼ばれたことに由来する。山門からすぐ石段にかかる。竹生島ほど急ではないが百四十

四段はやはりきつい。登りきるとそこには、西國三十三ヶ所第十四番札所の観音堂を中心に六角堂、毘沙門堂、観月堂と由緒ある堂宇が連なり、霊場巡拝の人々も多い。ここからは東方眼下に大津市街が一望でき、その向こうにはるか広大な琵琶湖が霞む。

七景も霧にかくれて

三井の鐘 芭蕉

その鐘はここから、北へ石段を少し降りた広場の金堂の傍にある。

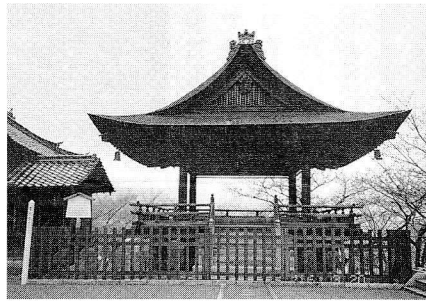
国宝の金堂はこの寺の総本堂で千五百九十九年に再建された七間四方総檜皮葺の大建築である。本尊の弥勒菩薩は天智天皇の念持仏で公開されていない。

とここでこの鐘は宇治の平等院、高尾の神護寺のそれと共に日本三名鐘の一つに数えられ、更にこの鐘楼は謡曲「三井寺」の舞台でもある。

昔、駿河の國清見ヶ関に住む女が一人息子千満丸を人買いにさらわれ、愛児探しの旅に出る。ひたすら苦難の行脚を続けながら、はるばる京都までやって来た。そこで清水の観音に参り親子の再会を祈願したところ夢の中で、愛児に会いたくば三井寺へ行けとお告げを受ける。

愛児への執念と長年の辛苦で今や物狂いとなった母親は近江へと向かい、滋賀の山を越えて漸く三井寺に辿り着いた。

折しも頃は八月十五日名月の夜とあって、僧侶達はうち揃って講堂の庭に出て観月のときを過ごしていた。ところがこの僧の中にさらわれた愛児がいたのである。息子は人買いから逃れてこの寺に救われ、今は仏門に入って修行中の身であった。



三井寺観月舞台 1849年再建

やがて鐘の音が響いて来た。

と、今まで月に見とれていた母親はその音に誘われるように鐘に近づき、遂には鐘楼に上がって自ら撞き始める。驚いた僧達は狂人と見てとり、急いでやめさせようとする。然し母親は、

「月には乱るる、心あり。

ましてやつたなき狂女なれば、許したまえや人々よ。」

と尚も鐘を撞こうとする。

「かように狂いぬぐれども、

我が子に似たる人だにもなし。

あら我が子恋しや候。」

このやりとりを聞いていた息

子は任職にあの狂女の故郷を尋

ねて欲しいと頼む。すると母親は、

「あら不思議や、

今の幼な声は正しく別れし

千満殿にてはなきか。」

と走り寄る。

「日こそ多きに今宵しも

この三井寺にめぐりきて

親子に会うも何故ぞ。

常の契りには別れの鐘と

いといにしに親子のための契

りには

鐘ゆえに会う夜なり。

嬉しき鐘の声かな。」

こうして母親の狂気も直り親

子は手をたずさえて故郷駿河へ

と帰ってゆく。

謡曲には「人買い」「子さら

い」のものがたりが幾つかある。

中でも東の『角田川』は哀切極

まりない名曲である。これに対

し『三井寺』は湖上にわたる名

鐘の響きと共に目出たい終曲を

迎える。

海のない、この地にあつて琵琶

湖はまさに大いなる海であつ

た。

さればこそ古来湖國の人々は、

「近江の海」或は「鳩の海」と

呼びならわし、その波音のうちに

みずからの哀歎を織りなして

来たのであろう。

近江の海 夕波千鳥

汝が鳴けば 心もしの

いにしえ思ほゆ

柿本人麻呂

能楽堂より

十八年四月〜七月の公演

横浜能楽堂は、おかげさまで

六月に開館十周年を迎えます。

これを記念し次の通り特別公演

を開催いたします。

「特別公演 第一日 第一部」

四月一日(土) 午後二時

「翁」(金春流) 金春安明、

(大蔵流) 山本東次郎。

「天の川風流」

(大蔵流) 山本則直。

「特別公演 第一日 第二部」

四月一日(土) 午後四時三十分

能「老松 紅梅殿」

(観世流) 梅若六郎。

狂言「末広」(大蔵流) 山本則俊。

「特別公演 第二日」

五月四日(木・祝) 午後二時

能「頼政」(宝生流) 高橋章。

狂言「弓矢太郎」

(和泉流) 野村万作。

「特別公演 第三日」

六月十七日(土) 午後二時

能「井筒」(喜多流) 友枝昭世。

狂言「文蔵」(和泉流) 野村萬。

「特別公演 第四日」

六月二十五日(日) 午後二時

能「安宅 勲進帳 延年之舞 貝立貝付」

(観世流) 観世清和。

狂言「月見座頭」

(大蔵流) 茂山千作。

「特別公演 第五日」

七月二十三日(日) 午後二時

能「石橋 俊寛之式」

(金剛流) 金剛永謹。

狂言「塗師」(大蔵流) 山本則俊。

三日・第四日は(完売) 各回ともS席八千円、A席七千円、B席六千円。

「普及公演 バリアフリー能」 五月七日(土) 午後二時。

能「紅葉狩 鬼揃」 (観世流) 観世喜正。

狂言「蟹山伏」 (和泉流) 三宅右近。

S席四千元、A席三千五百円、B席三千元。

介助者は一名まで無料。

三月二十五日(土) 正午より 電話・窓口・ファックス・Eメールにて発売。

八月からは開館十周年記念企画公演「江戸大名と能・狂言」をお送りします。詳細はお問い合わせください。

お問い合わせ・お申し込みは 〇四五(二六三)三〇五五まで。

《編集後記》

▽今年には、横浜能楽堂開館十周年です。開館当時の「幽玄」十一号(開館特集号)を読んでみた。

山崎館長が、鏡板に描かれている「老松と梅花」等について、その所縁を述べられておられます。これを読んで、改めてこの染井の舞台を見直し、大事にしていきたいと感じています。

▽寄稿ご愛読よろしくお願いたします。(MS記)

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜市港南区丸山台丁目 二九一七 新堀方
FAX 〇四五(一八四四)二九〇三

◎電話の場合
横浜能楽堂 原田由布子
TEL 〇四五(二六三)三〇五〇